

第5章 現在の和歌山と将来



和歌山が生んだ美術家たち

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

日本に古くからある美術としては、^{すいぼくが}水墨画や^{うきよえ}浮世絵、あるいは^{ぶつぞう}仏像などが思い出されるでしょう。日本の近代のはじまりである明治という時代は、こうした古くからあった美術のかたちが、大きく変化した時代でした。江戸時代の終わりに^{さこく}鎖国が解かれると、西洋の技術や学問が^こいっせいに流れ込みましたが、美術の分野でも^{あぶらえ}油絵のように、それまでの日本になかった新しい技法が^{ぎほう}伝わってきたのです。

ここでは、明治時代以後に活躍した、和歌山ゆかりの美術家たちを紹介していきます。

油絵を学んだ人たち

日本で最も早く油絵を学んだ女性画家の一人が^{じんないかいとこ}神中糸子(1860～1943 和歌山市出身)です。1876(明治9)年にできた^{こうぶ}工部美術学校という日本最初の美術学校で、イタリア人画家フォンタネージから油絵の指導を受けました。当時の油絵は、現実の風景を^{えが}ありのままに^{うつ}描き写すための技術として、今日の写真と同じ役割を^{にな}担っていました。しかし、やがて明治から大正へと時代が移るころには、画家たちは自分が感じたことや心にうかんだ世界を、絵によって表現するようになっていきます。



神中糸子 作《海岸風景》(1890年)

そしてこの時代、和歌山からも個性豊かな画家たちが次々と育っていきました。

力強い筆使いで、南紀の風景を描きつづけた^{はらかつしろう}原勝四郎(1886～1964 田辺市出身)。大正時代にフランスに渡り、さまざまな新しい表現方法を学んで帰った^{かわぐちきがい}川口軌外(1892～1966 有田川町出身)。少年期を^{しんぐう}新宮市で過ごした後、同じくフランスで最新の美術に触れ、戦前戦後を通じて日本の^{ちゅうしゅう}抽象美術の中心的な画家となった^{むらいまさなり}村井正誠(1905～1999 岐阜県出身)。彼らは、西洋の新しい美術を積極的に^{きゅうしゅう}吸収した人たちです。



川口軌外 作《少女と貝殻》(1934年)

一方、和歌山県出身の両親をもつ^{きのしたたかのり}木下孝則(1894～1973 東京都出身)、^{きのしたよしのり}木下義謙(1898～1996 東京都出身)の兄弟は、同じくフランスで、^{でんとう}伝統的な油絵がもつ、しっかりと^{びょうしや}した^{しゅうとく}描写法を^{しやじつ}修得し、写実的な作品を描きつづけました。

個性豊かな版画家、日本画家たち

大正という時代は、明治と昭和という二つの戦争の時代にはさまれて、比較的自由な時代でした。若者たちが芸術や生きる意味などについて深く考えた時代ともいえるでしょう。

^{たなかきようきち}田中恭吉(1892～1915 和歌山市出身)は、青春時代の悩める心を^{なや}木版画を通して表現し、自らの病と^{もくはん}向き合っていました。



田中恭吉 作《焦点》
(1914年)

真正面に向き合いながら、短い生涯を美術にささげた画家でした。父親が橋本市出身の恩地孝四郎（1891～1955 東京都出身）は、田中とともに美術に取り組み、のちに日本の版画界の指導者となりました。また、逸見亨（1895～1944 和歌山市出身）は、その田中の作品に感銘を受け、独自の版画を制作しました。

日本画という、古くからある美術の分野でも、この時期、才能ある画家たちが登場します。伝統的な日本の美と西洋美術の近代的な表現とを組み合わせ、新しい日本画を創り出した下村観山（1873～1930 和歌山市出身）。床の間の装飾品としてではなく、広い会場で見られる美術作品として、力強い大作の日本画を描いた川端龍子（1885～1966 和歌山市出身）。そして、西洋美術の手法を積極的に取り入れながら、日本画の枠にとらわれない実験的な作品を試みた野長瀬晩花（1889～1964 田辺市出身）など、個性あふれる画家たちです。



野長瀬晩花 作《島の女》
(1916年頃)

アメリカに渡った画家たち

和歌山県は、かつて移民県として全国的にも有名な県でした。明治初期から何万人もの人たちが出稼ぎ移民として、船でハワイや北米、南米にまで仕事を求めて渡っていきました。こうした異国の地で、厳しい生活をしてきた人たちの中からも、すぐれた画家が生まれています。石垣栄太郎（1893～1958 太地町出身）、ヘンリー杉本（1900～1990 和歌山市出身）、浜地清松（1885～1947 串本町出身）、そして高井貞二（1911～1986 大阪府出身 高野口小学校・伊都中学校卒業）らです。彼らはみなアメリカでさまざまな差別や偏見と闘いながら、絵を通して自らの信念を主張し、画家として認められた人たちです。

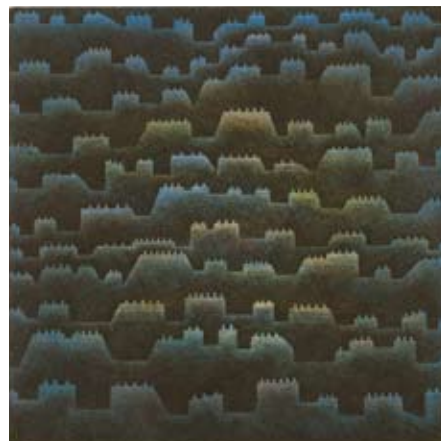


石垣栄太郎 作《キューバ島の反乱》
(1933年)

彫刻家と戦後の作家たち

彫刻家としては、確かな技術で生命感あふれる人体像をつくりつづけた建畠大夢（1880～1942 清水町出身）と、フランスの巨匠ブールデルに学んだ保田龍門（1891～1965 紀の川市出身）という、日本の近代彫刻を代表する二人の名前を挙げることができます。また建畠覚造（1919～2006 建畠大夢の長男）は、日本の抽象彫刻の先駆者として活躍しました。版画家としては、浜口陽三（1909～2000 広川町出身）がカラーメゾチント技法の開拓をおこない、数々の名作を生み出しました。

このように和歌山県からは多くの優れた美術家が生まれています。



浜口陽三 作《パリの屋根》(1956年)

* 1 浜口梧陵のひ孫。第2編 第3章「安政の大地震と浜口梧陵」158ページ参照。